



# Book Talk

編集・発行 海南高校図書館  
第4号 2009. 07. 06.

## 数学やって何になる？

高校生に数学を教え始めてから40年近く(この場合もアラフォーで言えるのかな? Chie先生)になる。以前の高校生(今の君たちの保護者の世代)から今の高校生まで、もちろんその時々での高校生像は異なるし、地域によっても違って来るのだが、いつも僕を迎えてきたのは、高校生たちが発する

- ・数学なんて、何の役に立つん?
- ・生きていくのにサインコサインはなんでえ必要なん?

という、時には声高な、時には声なき声であった。

30年前にある高校で、三年生最後の授業の時に『小学校以来12年間の数学の勉強を振り返って、数学についての感想文を書け』といった内容の感想文を書いてもらったことがある。ある女生徒は、

「数学の問題を解いていると推理小説を読むような興奮を覚えます。犯人を徐々に追いつめていくときに感じるのと同じような興奮を、です。」

と書き、またある女生徒は、まるで鎮魂歌のような文の最後を

「かずならば あてられまいと 下を向く ひくつな時が やっと終わりぬ」と結んでいた。

推理小説を読むような興奮を覚えるか、卑屈な時と向き合うか、その隔たりは余りに大きい。限りなく大きい。

もちろん、この二人の女生徒は、その後の三十年の人生をともに幸せに過ごしてきたようである。数学に対して推理小説を読むような興奮を覚えようが、単に「かずならば」でしかなくと思おうが、人はともに人生の幸せをつかむことができるのである。当たり前の話である。

しかし、「生きるために必要か」と問われれば、数学だけでなく、他の教科や学習も同様である。僕の祖母は「これは机です。」も英語では言えなかったが、86年間の人生を真っ当に生きたし、僕の母は「運動エネルギーは質量かける速度の2乗割る2で求められる」ことも知らなかったが、米寿のお祝いを受けることができた。当たり前のハナシである。理科も英語も古典も……数学同様、それを知らなくても「他人に頼らず、迷惑をかけず、人生を生き抜いていく」ことは出来る。ヒトは、別に『力学』を学ばなくても、1mの高さから飛び降りても大丈夫だけど5mからだだと大怪我をするし、10mからだだと命にかかわることくらいは知っている。それで十分でしょう? 違う?

じゃ〜、何故ヒトは、学校で、数学だの理科だの古典だの……を勉強しなければならないのだろう。そして、何故、数学が特に「やって何になる？」の嵐に巻き込まれるのだろう? 君たちは、どう思う?

英語なんて、将来〇〇商事に入って世界を飛び回ったり、△△新聞の外信部で仕事したりするのなら別だけど、そうじゃなかったら、せいぜい「ちょっと話したら便利な?」程度のものであるのに、数学の授業中も、数学なんかそっちのけ状態で「ナンとかステージ」をひもといて一生懸命英語学習に打ち込んでいるけど、それって「生きるために何の役に立つん?」

もちろん、それは教科や科目の学習だけでなく、読書にも言えることである。我が国でノーベル文学賞を貰った(貰ったて言うのかな〜?)小説家は二人いるけど、僕の知り合いの女性なんか二人目の方の小説なんか一冊も読んだことはないそうだ。

「なんか、文体とか生理的に合わないのよね」とのこと。一人目の方の小説は何作か読んだそうだが、君たちは二人の小説やエッセイを読んだことがあるかな? 読まなくても今まで生きて来たし、これからも(出版社に勤めるとかなら別だが)生きていけるよ。

注:一人目の方の小説は、前回紹介されていた。読んだかな?

伊坂幸太郎という方の本が、海南高校ではよく読まれているようだが、伊坂幸太郎の小説を読んで「生きるために何の役に立つ?」。ショパンとバッハの曲の違いが分からない生徒がいるかもしれないけど、ちっとも困らないし、ドラムを叩けなくても人生をわたっていける。当たり前である。

要するに、数学であれ、〇〇であれ、読書であれ、

- ・何の役に立つん?
- ・生きていくのになんでえ必要なん?

に対する回答は、「別に、生きていくには困らないよ。そりゃ、義務教育程度の読み書き計算は要るけどネ」でしかない。

あ〜、アホクサ。こんな「質問」や「疑問」に40年近く振り回されてきたのは、大いなる時間の無駄であったな〜。



## 身も蓋もない

とはいえ、そんなことが結論なら、まさに「身も蓋もない」噺

である。もうちょっと考えてみよう。ところで、何故「身も蓋もない」って言うのかなあ? 蓋って何の蓋なん? どうでもイイけど。

若い頃は、いや若くなくてもかもしれないが、ヒトは

- ・本当の愛とは何か?
- ・何故、ヒトは愛を求めるのか?

なんて『命題』に向き合うものである。僕が高校1年の時のLHRでは「男女間に友情は成立するか」なんてテーマで、1時間クラス討論をしたっけな〜。昭和真っ盛りの頃の高校のごく普通の日常風景。そして、「成立する派」と「しない派」に分かれてあ〜でもない、こ〜でもない話し合ったものである。もちろん、そのような『命題』に対する「回答」や「正解」はない。

注:正解がない事柄なのに『命題』なんて用語を使ってしまった。これは間違い。数学教師として恥ずかしい。

しかし、一つだけ「真実(たしか)」なのは、彼(彼女)ができてしまったら、ヒトは決してこのような疑問や悩みを考えることはないし、口にすることはない、ということである。そうなった少女(少年)の頭の中は、「明日のデートには何を着ていこう?」「誕生日のプレゼントは何が良いかなあ」という疑問や悩みで一杯になり、「愛とは何か」「何故、ヒトは愛を求めるのか?」なんて考える余地もなければ、必要もなくなってしまうのである。

だから、同じように、「数学って何の役に立つ?」だの「なんでえ必要なん?」という疑問は、数学を好きになれば、数学に愛されれば、そのような疑問はスッと解消するような類の疑問である。つまり、問題は

- ・何故数学を愛せないのか?
- ・何故数学に愛されないのか?

ということなのである。

ヒトは、別に役に立とうが、生きるのに必要性を感じようが、必要性を感じまいが、愛していれば&愛されていけば「役に立つ?」「必要?」などとは思わないし、言わないものだからである。なんか、橋本治みたいになってきたな〜、アハハ。



## 少しは数学のハナシを

ここまで書いて(正確には、キーを打って)くると、コダマ先生

の苦虫を噛みつぶしたような顔が眼に浮かぶようになってきた。「カタヤマ先生、もうちょっと真面目に数学の面白さとか魅力とか書いて下さいよ。先生に原稿を依頼したのはそういうことなんですから〜」

(以下、次号に続く)

(編集部より)いやホンマ。めくるめく感動の本論(次号)も片山節炸裂、乞うご期待。

## 数学のすすめ

片山先生による解法のテクニク

